議事要旨

件　　名	第2回品川区特別支援教育推進計画検討委員会		
日　　時	令和８年9月８日(火) 14時00分～16時00分	場　　所	荏原第五区民集会所 第一集会室
出席委員	山中委員長(学識経験者)・大関副委員長(学識経験者)・ 佐藤委員(障害者団体の代表者)・平林委員(区内関係団体の代表者)・ 河内委員(PTAの代表者)・杉山委員(PTAの代表者)・中郡委員(学校長)・ 実松委員(学校長)・倉次委員(学校長)・小林委員(教育次長)・ 染谷委員(関係課長)・石橋委員(関係課長)・川村委員(関係課長)		
傍 聴 人	５名		
内　　容	(公開) (1)検討委員会スケジュールについて (2)第1回検討委員会の議事要旨について (3)計画骨子案について (4)当事者(児童・生徒、保護者)の意見聴取(案)について (5)その他質疑		
主な意見等	(1)検討委員会スケジュールについて (　質疑なし　) (2)第１回検討委員会の議事要旨について (　質疑なし　) (3)計画骨子案について 第１章「計画の基本的な考え方」 第２章「特別支援教育における国や東京都の動向と品川区の現状」 について ○　計画期間について事務局側としての想定の期間を聞きたい。 ○　中央教育審議会の方で進めている来年 3 月に出る新しい学習指導要領について、どこまで情報を収集して組み込んでいくか。 ○　都の動向としては、都立の特別支援学校の分教室を小中学校の中に作るという委員会がもう第２回まで立ち上がって進んでいるところで、実施可能な自治体と調整していくというところまでしかまだ出ていない。そこで、将来		

主な意見等	的な見通しとして、今教室が足りない品川はやはりどこかの種地を確保して、義務教育学校をもう１個増やして、そこに分教室を入れていくぐらいの大胆な意見まで踏み込んで持っているのかどうか聞きたい。 ○　区立ではないが、明晴学園（私立ろう学校：特別支援学校）はこの計画に関わるようなことはあるか。 ○　品川区の特別支援教育における現状で、例えば５年間なり１０年間なり、特別支援学級とか通級の子どもが増えてきたとか、相談件数がこれだけ増えてきたというようなグラフや表はここに入ってくるのか。 第３章「計画の理念と施策の背景」について ○　「子どもと保護者の意向を尊重して」というところを「最大限尊重」にしてはどうか。今の品川の状況は、最大限尊重しながら就学相談を進められていると思うので、「最大限」という言葉も入れた方が良い。 ○　取り組みの方向、具体的な取り組み内容については、分かり易く示していただいている。もう十分やってきているものも多いと思う中で、やらなければいけない新たな展開を考えている事業はこれで、まるきり新しく出てきているアイデアはこれなのだということが、分かり易く示していただくともっと良いと思う。 ○　通常の学級における不登校であったり、特異な才能を特定分野で示すお子さんへの対応だったり、そちらの方に対する部分も含めてインクルーシブで検討していく必要があるので、通常の学級の中にいる様々な子どもたちへの支援を進めていく時に、通常の学級の教員の専門性やそれを支える体制をどうやっていくかというのは、指導主事およびアドバイザーによるというだけで大丈夫なのか。今後も確実にそれだけの指導主事をちゃんと確保できるのかを考えると、アドバイザー「等」の文字をつけて、民間の専門性が豊かな団体も巻き込んでいくという視点もお持ちなのかどうか。何かあったとしてもそういった時に対応できる組織にしておかないと、例えば２年後にそういう必要性が出た時に、「この計画にそれは盛り込んでないですから、ないですよ」と切られてしまっては何にもならないと思う。 ○　今回、骨子案を見せていただいてすごく整理されて網羅されていて分かり易く、特にＡ３の方は、これだけのことをやってきているのだということが

主な意見等	良く分かった。ただ、先ほどの委員が言ったように、新しい取組みがもう少し目立つように、こんなことがこれからできるようになるのだということが現場に分かり易くなると、期待感というか痒いところに手が届くというか、そんな印象が得られるのでぜひお願いしたい。 ○　品川区が考えるインクルーシブ教育の方で、「多様で柔軟な学びの場を整えて」とあるが、本当に今は多様になっていて、不登校の児童とか、どうしても学級でもない、通常にも行けない、通級にも行けないみたいな、どこにしてあげたらいいのだろうというお子さんが各学校に必ずいる。支援に繋げようとするが、保護者との話が合わなかったり、本当にここなのかなって私も迷うところがあり、学校に行けていないお子さんの支援については難しいが、箱ではない居場所があればというふうに普段思っている。 ○　「子どもと保護者の意向を尊重して学びの場を検討、決定していく」とあるが、就学相談を経て学校には入るが、その後の継続した保護者や子どもに寄り添っていくというところがどうもやっぱりすっぽり抜けてしまって、ここの学級に行ったからいいとか、ずっと通常級でいきましょうねとか、入ったら終わりみたいなところがあるので、そこで一緒に寄り添って相談していけるような、学校と保護者、子どもとの間に区としての専門機関とか福祉とか、そういうものがうまく入ってくると良いと常々感じている。 ○　この資料を見ていると、本当にこれだけのことができるのかと思った。カウンセラーなり相談者なり、それから教育者なり先生なりというところで細かくいっぱい書いてある。これは区職、都職どこで分かれてどういうふうになるのか。例えば、（新しく）学校ができても先生は都職で、でも品川区が教育委員会である中で、子どもたちや保護者たちと接するのは都職の方か、区職の方か。品川区でも児相ができたが、児相と東京都の児相とは連携していて、その連携がどういうふうになるのかは不思議だが、研修など本当にできるのか疑問に思う。 ○　支援体制の充実、合理的配慮の提供の理解と促進というところで、障害者施策推進課の方でも障害者差別のハンドブックを出していて、その中で合理的配慮の部分というのはかなり重要視をしており、色んな有識者の方にご出席をいただいて改定に取り組んでいる。その中で学校の部分に関しても、教員の特別支援教室に通っているお子さんに対する接し方や、親御さんの希望の配慮というところをどう対応していくかも、ハンドブックに載せていく必要があるのではということで、色々とお知恵をお借りしたいと思った。その中で、合理的配慮の合意形成のための対話の**シート**の活用と合理的配慮のＱ

主な意見等	＆Ａは、すでに実施をしているものなのか、それとも今後この施策を取り組むために何かしら作るという、今後の展望があるのかお伺いしたいことと、もしあればその辺を見せていただいて活用していきたと思った。作る段階でも、何かしら障害者団体の皆様にも色々なご意見を聞きながらハンドブックを作っているところなので、良ければ連携してやっていきたいと思う。 ○　保護者や地域への理解啓発というところで、ここは私どもの地域の部分もあり、特別支援教育の冊子とホームページでの公表ということで、どのような方向性を考えているか。（特別支援教育の分野は）今まで正直言ってほとんどお付き合いがなく、青少年対策とかそういうものでは地域のこういう方々との関係はほとんどないため、どの方向でいったら良いのか教えていただくと、私たちの地域も青少年対策の方向性ができると思う。 ○　保護者の理解はすごく低いと思う。子どもは学校でこういうことを学んで家に帰ってきて、「こんなことあったよ」と親に話すと思うが、やっぱり親があまり理解していないので、例えば、そういうイベントがあるから子どもたちは行こうってなっても、親は「え？」というふうになりがちかなと思う。そういう中で何ができるかというのを考えた時に、中学校の保護者が子どもたちと一緒にイベントに出ることはほぼない。そういう意味では小学生とかそれ以下、未就学児、保育園や幼稚園などのイベントでは親は来るので、そこをうまく活用する方が良いと思う。仕事でパラリンピックやオリンピックへ取材にも行って、選手たちと触れ合うイベントなど関わりがあるが、その地域の障害を持っている方と会うよりも、まずは分かり易くアスリートなどに子どもたちが会うという時に、親も一緒に来るというようなことで、子どもたちが垣根なく触れ合う姿を親が見ると、少し意識は変わると思う。現状、多分これだと見る人がいなくて、届くことがなくて、もう少し工夫したことをやらないと保護者に届きづらいなとＰＴＡの立場で感じる。 ○　戸越台中学校が介護施設と一緒になった時に、本来文部省の指針では中学は４階しかいけないという話があったが、学校の上に介護施設を作るということで、品川区は一番にあの施設を作り有名になった。品川区は特別支援学校をどうするか。四中の跡地と戸越公園と文庫の森と図書館と児童センターと区民住宅、あそこは一体なのでうまく開発できないか。エコルとごしもいいがやっぱり子育てのほうが先ではないかと思う。先ほどの委員がおっしゃった触れ合いと同じようなことが、地域としてはうまく開発すればできるのではと思う。

主な意見等	第４章　「取組の方向・具体的な取組内容」 ○　コーディネーターの養成ということで、ぜひ学校現場のニーズに合致した実践的な研修を期待したい。また、その内容については、コーディネーターを中心にして全教職員に周知して、子どもたちのために広く活用していきたいと思う。 ○　第 1 回目のところから、就学前の早期連携ということで保健センターの活躍について知ったところであるが、私立および公立の幼稚園、保育園の方々の理解に向けて、何かアプローチが今後期待できるのかということも知りたい。 ○　先ほどから出ている保護者・地域への理解啓発については、保護者が相談窓口や関係機関などの有益な情報に触れられる機会が多くあるといいなと願うとともに、相互の理解が深まる機会の提供も望む。 ○　教育の相談窓口の設置という記載があったと思うが、これは総合的に相談を受けるという形なのか、それとも特別支援に対して専門性を持って相談窓口を設置するのか知りたい。保護者がどの窓口を選択したら良いか分からないとか、相談しに行ってもこの窓口ではなさそうだということが結構あり、ここに行ったら適切な支援が受けられると紹介してもらいたい。総合的な窓口で考えると、色んな分野を知っていないとスタッフの方が難しいと思うが、そういったスタッフの教育なども必要になってくる。 ○　学びの場の環境整備にも絡んでくるが実際に副籍の制度はあるが、多分希望されて直接交流している方ってすごく少ないと思う。それは行くだけのメリットを感じ取れてないとか、あるいはお仕事をされている保護者の方が中々行きづらいことがある。例えば、ガイドヘルプをきちんと品川区として手当てして、保護者の負担がなく副籍交流校にきちんと行けることを確実に保障するためには、制度上は都立特別支援学校に学校の席はあるが、小学校に「品川区民席がありますよ」と、おうちの方が行けなかったとしても、そういう制度がありタクシー券も出るぐらいの大胆ことができないかと。でもそれは教育委員会の負担ではなく他課にまたがってくることなので、そういう話こそちゃんと乗せていかないと、品川区としてのインクルージョンになっていかない。 ○　先ほど５歳児健診の話が少し出たが、レジリエンス育成というところで、これはおそらく児童や生徒さんのレジリエンスってことだと思うが、親のレジリエンスというものが結構大事な視点かなと思っている。５歳児健診とか受けた方で就学相談につながる時に、中々親の方が受容できずにそのままなんとかつながったとしても、子どもが育つ中で中々関係性がうまくいかな

主な意見等	い、そういった事例がある。学校を卒業した後も親子関係は続いていくので、小さい頃からの関係でも保健相談になって親子で関係がこじれてしまってバラバラになるとか、それこそ事件につながるとか、そういったことも多々受けることがある。こういったレジリエンスの育成というところに、その対象になるお子さんの親にも理解してもらって、ご自身も子どもに対してしっかり向き合えるとか、そういった視点もあると教育を受けた後も幸せに過ごせると思うので、ご検討いただきたい。 ○　中学校の自閉症・情緒障害特別支援学級なのですが、保護者の方が気にしてよく話題にされるのが、中学校を卒業した後にどんな道があるのかというところを、中学生になる段階では気にされている。このため、このキャリア教育の充実というとこの視点ってすごく大事かなと思い、知的障害のあるお子さんと、また自閉症・情緒障害特別支援学級の方とは少し違うかもしれないけれども、このキャリア教育の充実によって、何か体験とかたくさんできて、「自分でできることがこんなにあるんだ」ということが分かるということが、すごく大事なことだなと常々思っている。就学相談の保護者との面接の時も必ず出てくる。「中学校を卒業したらどんな進路があるでしょうか」というところでは、保護者の理解もまだ進んでないのかもしれないし、当人たちの力を引き出してあげるということも大事で、その視点の一つがキャリア教育の充実で、この言葉があって良かったなと思っている。そういった特別支援教育を受けている子どもたちがうまく活用できるような取り組みがあると嬉しいなと感じた。 ○　子どもが不登校である場合は、先に親のメンタルが子どもの将来のことなどで非常に不安になる部分がある。進路などの情報があれば少し安心できる部分とか、こういう支援があるんだというところはあるが、まず相談に行かなければその情報が提供されないというのは、かなり親としてはそのステップが大きくて、中々相談に行けないということが一つある。ネットからアクセスできるような形で、「じゃあ相談に行ってみよう」というような、ハードルを下げていただくための取り組みとかも考えていただけると助かる。 ○　全体像を見ていて皆さんがおっしゃっているようにすごく色んなものがあって、これが実現したらすごく素敵だなと思うが、興味がある人しか中々入らないというところでの理解の通らなさみたいなものがある。色んな事業でもそうだと思うが、分かりやすい指針というか、例えば、「品川区は小学生以上からお年寄りまでの全員が、白杖を持っている人の声の掛け方を知っています」みたいなこと、「それを目指します」みたいなこととかどうか。要するに１本、インクルーシブ全部をやるってことではないが、１個その目標を決めてこれを全部広めるとか、そうしたら町会とかにもとにかく「ここ２年はこれやってください」と言って、結果的には全部を把握するわけでは

主な意見等	ないが、全員がそれをできるという街に障害を持っている人って来やすいと思う。それを通じて、一回でもそういうものに触れた人というのは、少しでも興味を持てる可能性が増えそうな気がする。それこそ、対外的にも「品川区はこんなことをやっているのです」というのが非常に分かりやすいと思う。だからそれは別に白杖ではなくても良くて、「全員が手話でここまではできます」とかでもいい。 いつもこういうことって「小学生に」「中学生に」ってなるが、「全員が」という打ち出し方をすると品川区の雰囲気が変わるというか、とにかく全体的に言えば入り口があまりなくて、何かをキャンペーンとして１個作って流したうえで、全部回っていった方が色んな人に届くのかなという感じがする。ＡＥＤ 講習と一緒で、そういうレベルで「品川区は全員がＡＥＤ使えます」とか、「品川区は全員が白杖を持っている人に声を掛けられます」みたいなものがあった方がこの小難しさというか、どうしても素人では具体的な話もそうですけど、普通に出てきても何のことかが分からない。でも、それに入るための１歩目がすごく必要だなと思った。 (4)当事者(児童・生徒、保護者)の意見聴取(案)について ○　障害者福祉計画を作るところで、アンケートが本当にすごく重要だなというところを感じている。中々当事者の声を聞くという機会がないので、そのアンケートの結果を取るだけではなく、どう反映していくかというところがやっぱり重要ということで、こちらも今苦戦しているところではあるが、Ｑ３３と３４の学校関係機関の情報共有の部分で、そもそも情報共有ってすごく難しく、放課後等デイサービスの所管になっているのですごく感じている。例えば、すまいるスクールは区がやっていて、医療機関や放課後等デイサービスは民間になる。また、幼稚園・保育園も民間・私立・公立があるので、中々そういった違いでも情報共有ってすごく難しさが出てくるかなと思う。今回のアンケートの中では、そもそも関係機関がちょっと広すぎて、どういったところで「そう思う」、「どちらかというとそう思う」などを選択した時に、果たしてどこと連携をしているのかというところで、今後の展開が変わってくるのだろうなというところが一つある。 ○　今回、就学している子たちに聞くことになるので、年齢とかによってもまた変わってくると思うが、例えば１年生の親とかだったら、幼稚園、保育園のどこかによってもまた違ってくるということがある。その就学の間にかけて、どう連携を学校が取ってくれているのかをどう感じたかということもあり、広く言えば医療機関とかは年齢に関係なく通院していればというところもあると思うので、Ｑ３３とＱ３４のアンケートを取ることがすごく重要なところだと思う。情報連携は親にとってはすごく重要なところなので、本当

主な意見等	にあれば良いなと思うが、そこをもらった所管行政としては、それをどう今後生かしていくのかというのが、このアンケートの仕方ってすごく難しいと思う。これは本当に障害者福祉計画でもこのようなアンケートのとおり、障害種別や年齢に応じて色々差が出てくるというのを策定委員会の中で指摘を受けた部分なので、そういう指摘を受ける前に何か方策があれば、こちらの方では直していただき同じ失敗をしないように、難しいとは思うが何かしら考えていただけると良いのかなと思った。 ○　設問を見て、地域のことは一つもなかったのかなと思う。実際に保護者の方って何かに参加してみたいとか、「やっぱり難しいわ」って思っているのかなど、そういう部分では何か一つ入れていただきたいと思う。 ○　先ほどの委員のご意見を受けて、３５番３６番の回答あたりには地域の方とか入っても良いのかなと思った。民生委員とか様々お役目のある方がいる。 ○　すごくシンプルに通常の学級の保護者という立場なので、その立場で質問を見てどう答えるかを考えたが、くしくも先ほど話に出た副籍交流の話で、「知っていますか？」 というので「知らない」って答えて以降、知っている前提の質問が続くのでこれについては説明をどこかに加えていただけると、知らないという人も分かった状態で回答ができると思った。３３・３４に関しては、「分からない」以外の答えがしづらいというか、要は通常の保護者だと、その他の特別支援関係の保護者の場合は考えて答えられると思うが、そこはもしかしたら外していいのかなという感じがした。これで通常の保護者のところで分かってくることは、みんな「分からない」が異常に多いことになるのかなと感覚値だが思う。だから相談のところとかがうまくどういうふうなところに相談を考えていたりとか、知っているかみたいなのことが導き出せればいいなと思う。最後の３７の「このまま続けて十分だと思いますか？ 」は、まさに皆さんの所感がはっきり出ると思うので答えやすい部分だとは思う。 ○　３４のところで、学校生活支援シートと就学支援シートがあり、このアンケートを取るにあたって関連するが、先ほどの委員もおっしゃっていたように親って分からないと思う。このシートに関して、親と施設が共有するようなシートになっているのか、学校と三者が見られるようなシートになっているのか。

主な意見等	○　私もこういうアンケートをいっぱい作るが、その時に就学支援シートや学校生活支援シート、先ほどの副籍交流とか、このアンケートにくっつけておくことで、アンケートを実施すること自体を広報の機会にして、「知っていますか？」って質問をしながら、実は知らせているというパターンで人って読んだりするので、大いに利用した方が良いのかなと感じる。 ○　アンケートが保護者にまかれたら通常の学級の担任が質問されると思うので、これをまく前に必ず各学校には、保護者から質問があることを教育委員会から出してあげてください。 ○　期間が大体２ヶ月ぐらい設けているが、障害者福祉計画は短めに設定しているので、回答率があまり良くなかった。次のアンケートは回答率を上げるためにどうしようかなというところを今考えているが、学校の先生たちのお仕事の負担になるかもしれないが、せっかくやるならリマインドとかをして、回答率が上がったほうが良いと思う。 ○　私一人で集計するのは何万だったりするが、集計はそんなに量が返ってこなくて、多分出す方が大変なのかなと思う。先ほどのお話の流れで広報的な意味で考えた時に、いっぱい出したほうが良いと思う。回答率を上げるという取り組みはすごく大変だが、回答率を上げることより、多くの人にこれに触れてもらうということを目的にした方が、これにおいては良いのかなという感覚がある。事務的に何が大変なのかによって、どこを切るかは必要だと思うが、副次的な目的が広報なのであればそれは大いに色んな学年どころか全部に出しても良いものと思う。特に今は紙ではないので、比較的にまくだけならいけるのかなという感覚である。 ○　５年生と８年生ということで、６年生はどうか。本校は知的障害特別支援学級があり、６年間過ごしてきてリーダーとして色んな縦割り班活動とか委員会、クラブを一緒にみんなでやってきたという思いがある。５年よりも６年のほうが成長もあるし、客観的に見られるというか、そういう年齢でもあるなというのは感じた。 ○　もし可能であれば、絞らずに広くまいたほうが、地域ごとに資源も違うので差が出ると思う。どこ地区はこういう答えだけど、どこ地区はこういう答えだったなんてことがきっと出る。前期後期、全学年やるのはいくつかスポットで各ブロックで一校とか、あるいは校種で２校ずつ協力をお願いするとか、そんな形でやったらどうか。ぜひ検討していただきたいのは、インクルージョンで考えていくのであれば、通常の学級しかない学校も含めて、広めていく意味合いも含めて取っていくというのは意義があると思う。

主な意見等	○　設置校だけではなくて、例えば、副籍を受け入れている学校とかで設置校ではないところもあり、きょうだい児が設置校ではないところに通級・通学している可能性もあるため、広くアンケートを取っていただきたい。 ○　アンケートを取る学年について、保護者の観点で見てほしいってなった時に、自分の子が忙しくない学年でないと見ないと思う。６年生は中学受験を控えていて、配られても見ない。中学３年生は自分の受験があり、そこまで見られないということがあるので、外した８年生・５年生というところは比較的に回答しやすいと感じている。 (5)その他質疑 なし
そ の 他	次回会議日程を周知した。（11 月 9 日 10 時から中小企業センター大会議室）